

村松 亮太郎

Muramatsu Ryotaro [アーティスト、NAKED, INC.代表]

五感に訴える体験を
世界中の人たちに届けたい

かつて映画館でスクリーンに投影されていた映像は、デジタル化され、大型ディスプレイやプロジェクターにより大空間に投影されるようになった。同時にデジタル化された映像は、よりパーソナルな感動表現をも生み出すための一つのツールにもなった。東京駅のプロジェクションマッピングでその名を馳せ、日本のデジタル映像の第一人者として先頭を駆けつづけているアーティスト、NAKED, INC.代表の村松 亮太郎氏に、感動を生み出す表現が秘める可能性と未来をたずねた。

表現の「コア」にこだわり 表現手法の境界を越える

— NAKEDが注目されていますね。

NAKEDを設立したのは1996年、ちょうどインターネットが始まった頃です。当時のPCは処理能力もストレージも今よりずっと貧弱でした。僕が表現したかった映像は、デザインや音楽と違ってはるかに情報量が多いので、市販PCはそのまま使えません。ネットなどで情報を集めて独学で改造を加えていました。日本ではその頃、デジタル映像を動かす人は、まだそんなにいませんでした。試行錯誤で、動くデザインと言われるモーショングラフィックを行っている、広告やテレビのタイトルバックの仕事が依頼されるようになりました。そしてデジタルでデザインをしている人やDTP (Desk Top Publishing) に挑戦する人たちと繋がり、放送局や広告代理店との仕事も増えてきました。そうなる会社組織が必要だということでNAKEDを設立することになったのです。

NAKEDの3つのコンセプトは、この時に作りました。「コア・クリエイティブ」と「ボーダレス・クリエイティビティ」、「トータル・クリエイション」。表現の根っこにある「コア」にこだわり、そして、その表現を創り出すためには、表現手法の境界にこだわらず、ボーダレスに活動する。この相乗効果で、トータルな一つのクリエイションに高めていく。そのようにして表現を創り出す活動をしているうちに、いつの間にか皆さんが集まってくれるようになってきたと思います。

CONTENTS

特集：高度化する文化情報発信施設

SPECIAL INTERVIEW	
村松 亮太郎 氏	1
SPECIAL EDITION	
ウポポイ(民族共生象徴空間) 国立アイヌ民族博物館	5
メットライフドーム	9
新宿ウオール456	13
ところざわサクラタウン	15
KADOKAWA 所沢キャンパス	19
くらしは文化	
豊橋市公会堂	21

*本誌では略称を用いています。また、一部敬称は略させていただきます。
表紙写真：ウポポイ(民族共生象徴空間) 国立アイヌ民族博物館

PCで映画が作れる時代が創造の幅を拡げた

— なぜ、映像表現を選ばれたのですか。

高校生の頃、自分の道を探っていた時、僕はまず、関心があった映画の世界に入ろうと考えました。俳優にはなったのですが、自分が思うままの表現が許されずプロダクションと衝突。そんな時、兄貴が見せてくれたPCで稼働する画像処理ソフトに衝撃を受けました。それまで映像所に出さなければいけなかった写真が、自分でさわれるのです。

当時、自分が思う表現を形にするために編集スタジオを作りたいと考えたことがありましたが、数億の費用がかかると言われて諦めていました。しかし、フィルムやテープを専用機器で編集するのではなく、PCで映像を直接編集し、映画を制作する時代が、もうそこまで来ているとも聞きました。それは、デジタルビデオが登場した頃です。デジタルビデオの画像をPCで編集すれば、自分が思うままの作品ができるのではないかと。そう思って取り組みはじめるつもりでしたが、ここからが大変でした。すべて自分でシナリオを書き、俳優をし、撮影して、音楽を付け、PCで編集する。当然、タイトルのデザインもPCで作る。表現の始まりは映像でしたが、音楽、デザインも含めて、創造の幅が広がっていったのです。



東京駅3Dプロジェクションマッピング「TOKYO HIKARI VISION」(2012年) ©東京ミチテラス 2012

映像の新時代を拓いたプロジェクションマッピング

— 東京駅のプロジェクションマッピングは衆目を集めました。

東京駅の映像演出は、世の中に3Dプロジェクションマッピングを大きく知ってもらうきっかけとなった仕事でした。あれは東京ミチテラス2012という丸の内仲通りを演出するプロジェクトだったのですが、東京駅自体も改修してお披露目のタイミングで、表現方法を議論するうちに「駅舎にプロジェクションマッピングをしよう」となりました。これは、プロジェクターの性能向上や、機器のデジタル制御が可能にしたのです。僕は、メディアや技術の発展と表現は切っても切れない関係にあると考えています。もちろん、表現したいものが先にあるの



食×アート体験型レストラン「TREE by NAKED yoyogi park」 ©naked inc.

ですが、技術の発展がなければ、今やっている表現には繋がりません。一方で、表現手法にはこだわりはなく、デジタルでもアナログでもどちらでもよい。映画が本か音楽か、手法やツールはその次で、最終的に何を伝えたいのか、どのような感動になれば良いのか、何が美しいのかが大切。バックエンドにそれがあれば良いと考えています。

感動を生み出す新たな表現の可能性

— 映像空間からリアル空間へとステージが広がりました。

映像という表現を追求していた時は、視覚と聴覚に訴える表現で感動を紡ぎ出していました。ところが、リアル空間を対象とすると、さまざまな角度から多様な感じ方をさせる面白さがあります。シーンをつくりだすという意味では映画を作っていた時と何も変わっていないと思うし、物語性がその背景にあるということも同じです。リアル空間で感動を生み出す表現を探っていった結果、自ずと五感で感じるものになっていったのでしょう。それを最初に意識したのが「NAKED FLOWERS」です。これは、都会の中に誰も見たことがない秘密の花園を創り出そうという企画で、多くの人に共感を持って受け入れられました。ここではデジタルを強調するのではなく、皆が楽しめるように自然と融合したものをめざしました。テーマが花なので「匂い」が関わり、木肌にさわる感覚も良いので「さわる」にもこだわりました。このように、当初のコンテンツから多様な感覚に訴える要素が入っていたのです。五感というコンセプトを考えたとはいえ、その空間が結果的に「五感で感じる」というコピーに集約していったのです。

村松 亮太郎氏

アーティスト、NAKED, INC.代表。大阪芸術大学客員教授。長野県・阿智村ブランディングディレクター。1997年にクリエイティブカンパニーNAKED, INC.を設立以来、映画やテレビ、MV、広告、空間演出など、ジャンルを超えてさまざまなプロジェクトを率いてきた。監督作品は長編/短編合わせて国際映画祭で48ノミネート&受賞。近年では「FLOWERS BY NAKED」「TOKYO ART CITY BY NAKED」などのイマーシブ(没入型)イベントや、華道・茶道・香道・歌舞伎・能狂言といった伝統文化・芸能と先進の表現を掛け合わせたインスタレーションや公演を手がける。大阪芸術大学で客員教授を務めるほか、ブランディングディレクターを務める長野県・阿智村をはじめ大阪府・堺市や佐賀県など日本各地での地方創生イベントや文化プロジェクトに取り組む。2018年には個人アーティストとしての創作活動を開始し、国内外で作品を発表。



エポックメイキングなスペースプレーヤー

— 「TREE by NAKED」では食を提供されていますね。

「TREE by NAKED」は食×アートの体験型レストランと銘打っているもので、東京・代々木公園と岐阜県多治見市でサービスを提供しています。VR技術・プロジェクションマッピング・照明・音楽・美術造作によって空間全体を演出し、たとえば、代々木公園のお店では地下1階から2階までの3フロアを移動しながら食とアートが融合する体験をお届けしています。食自体がアートであり、さらに食という体験そのものがアートといえます。シーンをつくるという視点で考えて、人が集って楽しめる空間に、アートとしての食を提供できないかと考えました。東京駅でプロジェクションマッピングをしたときには約30万人を超える人びとが集まったのですが、時を経るとその驚きも薄れ、感動が当たり前ものになっていきます。あの感動をくらしに近づけたら、僕たちの表現はどうなっていくのだろうと考えたときに、一つの形として当然のように食を取り入れていくことになりました。ここではスペースプレーヤーを採用しています。あれはとてもエポックメイキングな製品だと思っています。素敵な建築に大きく四角いプロジェクターが入ってくると違和感がありますし、照明も必要になります。ところが、プロジェクターであり照明のようにも使えるという、いくつかの課題を解決しようとしたのがスペースプレーヤーだったのでしょうか。アートをテーマとしたレストランで使うには非常に相性が良いと感じました。実は、スペースプレーヤーが発表されたときから、僕はものすごく応援していたのです。

ノンバーバルの感動をグローバルにネットワーク

— 現在は何を手掛けられているのでしょうか。

コロナ禍になるまで、世界中から仕事の依頼が増えていました。言葉に依らないグローバルな表現は、どこの国の人にも理解されやすいものです。NAKEDが手掛けたその一つが「Breath Bless project」で、「平和への祈りを、アートで繋ぐ。」をコンセプトに、世界中のあらゆる地点を結びながら、人びとが参加することで成長するアート作品を創り出しました。たんぽぽの綿毛を飛ばすように「Dandelion」に息を吹きかけると、その綿毛は遠く離れたまちに舞い移って花を咲かせます。さまざまなまちから発せられる「Breath(吐息)」が、平和を願う「Bless(祈り)」の種となって世界に広がるインスタレーションです。これは、リアルとバーチャルがシンクロして、ネットワークそのものが国境を越えるアートとして成長し続けるものです。



「Breath / Bless Project」(2020年~2021年) ©naked inc.

この進化したバージョンを「NAKED GARDEN ONE KYOTO」として開催しようという計画があります。二条城に留まらず、平安神宮、平等院鳳凰堂、仁和寺、東福寺、清水寺など、十数カ所の神社仏閣が宗派を超えて、また産官学が連携して、世界平和のアートを京都から始めようというものです。日本庭園のように多様な要素が共存する京都を一つの庭に見立て、世界に向けて世界平和のアートを発信し、そのあとは、シンガポール、香港、パリ、ニューヨークなども繋げていこうとしています。

僕は、たまたま映画という表現から入りましたが、より豊かなものを伝えるために目や耳だけでなく五感をすべて使いたいと考えようになりました。同時に技術進歩により、表現手段も多彩になっています。映像や音楽や言葉だけでは伝わらない感動、それをコアとして、これからも探っていきたいと思っています。

— ありがとうございます。

NAKED, INC. - YouTube

